

西の京丘陵で発見された平安時代初頭の墓

奈良市六条西

調査の概要 平城京の東西南北の端には、それぞれ京極大路があり平城京内外を区画しています。調査地は京の西端を限る西京極大路に近い位置にあたります。この地は起伏に富んだ西の京丘陵上のため、条坊道路と宅地は部分的にしかなかったと考えられています。

調査の結果、奈良時代の掘立柱建物20棟、掘立柱塀7条、と平安時代初めの墓5基などが見つかりました。

建物群は、丘陵の上面の平坦地と丘陵南側斜面を籬壇のように成形した平坦地に築かれています。建物の面積は約9㎡(約3坪)～約40㎡(約12坪)あり、いずれも中小規模で、平城京内ではよく見られるものです。これら建物群は大きく3回ほど建て替えられています。

墓は、いずれも丘陵の南斜面側にあり、細かくみると3群に分かれて分布しています。並んだ木棺墓3基と、単独で木棺墓と木櫃墓が1基ずつあります。墓の深さは0.15～0.6mありますが、墓の上面は削られて失われており、墓の上の盛土は確認できませんでした。墓は建物群が廃絶後の平安時代初め頃に築かれたと考えられます。

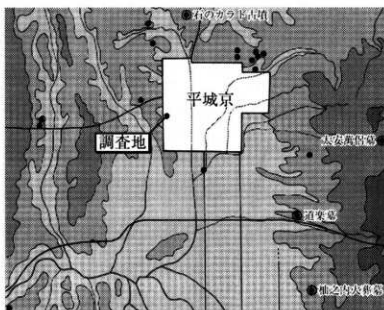
木棺墓は、遺体を納めた木の棺をそのまま埋める土葬の一種です。今回検出したものは遺体を北枕で埋葬したと考えられます。いずれの墓も、遺骨は残っていませんでしたが、木棺を留めた釘が出土しています。また少量の副葬品(神功開寶1枚、帯金具1点、不明銅製品1点)が出土した墓もあります。他は副葬品は出土しませんでした。

木櫃墓は一度別の場所で遺体を骨にした後、木櫃内に遺骨を納めて埋葬したと考えられます。木櫃内に遺骨は残っていませんでしたが、副葬品の須恵器と土師器の壺が1つずつあり、壺の中にはなんにも入っていませんでした。これまでの発掘調査例から、火葬した遺骨を納めたと考えられます。

今回の調査での成果は、西の京丘陵上で墓を確認し、それが遷都後とはいえ平城京城内に築かれていたことです。平城京内には墓を築くことが法律で禁じられており、天皇や貴族は京外に埋葬されていました。人口がおよそ10万人と推定される平城京ですが、墓の発掘例は数少なく今回は貴重な例となります。宅地の居住者と墓の被葬者との関係など不明な点も多く、今後の検討が必要です。



調査位置図 1/10,000



平城京と墓

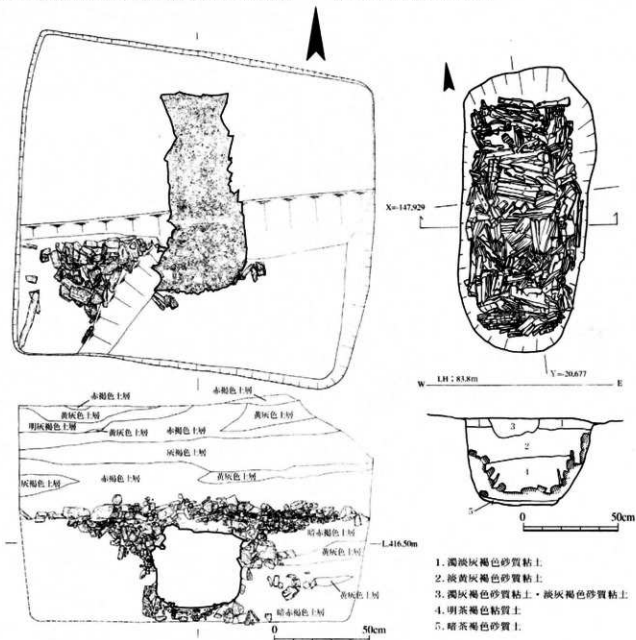
『平城京城』図録(朝日新聞大阪本社企画部、1989)より(一部改変)

木櫃墓 木櫃墓について少し詳しく見ましょう。長さ約70cm、幅約36cmの木櫃に遺骨を納め、長さ約1.5m、幅約0.7m、深さ約0.5mの墓穴に埋めます。埋める際に木炭を木櫃の底に敷き、周囲にも木炭を詰めています。この木炭の役目はよくわかりませんが、当時の墓によく使われています。木櫃は釘留めのように、鉄釘が数本出土しました。

この墓とよく似た構造の墓が平城京の東の山中、現在の奈良市此瀬町で見つかっています。古事記の撰者、太安萬侶の墓です。この墓は長さ約66cm、幅約37cmの木櫃に火葬骨を納め、長さ約

1.6m、幅約1.8m、深さ約1.6mの墓穴に埋めます。埋める際に木櫃の底と周囲に木炭を詰め、さらに木櫃上にも炭で覆います。木櫃内には骨灰と副葬品の真珠があり、さらに木櫃の底板と炭との間から墓誌（死者の名前や経歴などを記したもの）が出土し、太安萬侶の墓と判明しました。

両者を比べますと、木櫃の大きさや木櫃を炭で覆う点が似ている一方、太安萬侶の方が墓穴の規模が大きいこと、墓誌を持つことなどの差が見られます。太安萬侶は四位の高級貴族であることがその理由かもしれません。



『太安萬侶墓』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第13冊
奈良県立歴史考古学研究所編 1981より（一部改変）

太安萬侶墓実測図 1/20

今回発見の木櫃墓実測図 1/20

発行 奈良市教育委員会 平成18年7月